

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	研究者による社会への発信
別タイトル	Researchers' way of offering information to society
作成者（著者）	近藤,元就
公開者	東邦大学医学会
発行日	2020.09.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 67(3). p.111 111.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	論評
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2019 064
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD42186322">https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD42186322</a>

## 研究者による社会への発信

2019年12月に中国で初めて確認された、新型コロナウイルスとして知られるSARS-CoV-2による感染症、COVID-19が世界中に広がりました。日本でも緊急事態宣言が発令され、SARS-CoV-2の封じ込めが図られました。本稿執筆時(2020年6月30日)、日本では中国由来の第1波、ヨーロッパ由来の第2波が収束しかけたところですが、世界からはCOVID-19再燃のニュースが届いています。これまでも、人類は新規ウイルスの地球規模での感染を繰り返し経験してきました。そして、交通機関が発達した現在、COVID-19はあっという間に世界中に広がりました。科学の発達は目覚ましく、知識量は飛躍的に増大しています。しかし、このような時代でも、新規ウイルスに対してヒトの出来ることは限られているということを再認識しました。

不安に駆られた人々はCOVID-19の情報を求めました。その要求に応え、感染症学や公衆衛生学、あるいは免疫学の専門家が連日テレビ等のメディアで解説を行いました。研究者は納税者に対して研究成果を発信することが求められているので、要請があれば、それに応じ意見を述べるのは社会的責務といえるでしょう。

研究者は論文を通して最新の知見を得ています。論文は査読の過程で論理のギャップや結論の妥当性に疑念のある場合、修正、あるいは追加実験が求められ、より客観性のある形で発表されます。したがって、査読は論文の信頼性を高める上で重要です。その一方、査読は数ヶ月から、場合によっては1年にも及ぶ、時間のかかるプロセスとなる場合があります。研究のスピードが速まる昨今、論文が発表される前に実際の研究は遙か先に進んでしまっているということも起こります。このような事態を回避する方策の1つが、査読の迅速化、かつアクセプトと同時にオンラインで発表するための学術雑誌の電子化でした。COVID-19関連の論文は投稿されてから、これまでにないスピードでアクセプトされ、次々と公表されています。発表を急ぐあまり、論文の質に問題が出てきている場合もあるかもしれ

ません。実際、COVID-19関連論文の撤回がトップジャーナルであるNew England Journal of Medicineで起きました。

加えて、オンライン上のプレプリントサーバーで、査読を受けていない論文が公表されています。さらに、COVID-19関連の研究結果(といわれているもの)が、データ提示のないままに報道されることもあります。こうなると、何が正しくて、何が疑わしいのか、専門家でも判断がつかないことがあります。

新規感染症のパンデミックという、緊急性の高い状況の中で各国政府はどのようにCOVID-19の拡散を防ぐか、死者を出さないようにするか、判断の材料として科学的知見を求めました。もしかしたら撤回論文の結果に基づく政治判断もあったかもしれません。ただし日本の専門家会議では、異なる領域の専門家が意見をかわし、その都度、その時点で最も確からしいことを求めていたと思います。それに対し、テレビや週刊誌、あるいはインターネットにおける専門家の発言は、時には一個人の見解に過ぎない場合があります。専門領域の違いにより、研究者個々の知識の濃淡、見解の違いがあるのは当然のことです。

その一方で、より正確な情報の発信も試みられました。例えば、ホームページ上でCOVID-19に対する最新の見解を発信した学会がありました。また、COVID-19の現状の説明、治療の可能性、ワクチン開発の動向などの解説記事を連名で学術雑誌に掲載した研究者もいました。しかし、この方法により広く社会に知見をもたらすことが出来たかは検証の必要があります。SNSなどのメディアとの連携も今まで以上に考慮すべきでしょう。研究者が研究成果や意見を社会に発信することが責務ならば、即時性と科学的根拠を担保してどのように伝えていけば良いか、SARS-CoV-2のパンデミックを契機に、私達はより良い発信方法を改めて考える必要があります。

(東邦大学医学部免疫学講座教授：近藤元就)

DOI : 10.14994/tohoigaku.2019-064